まわる闇と踊ろう

やさいとぶどう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まわる闇と踊ろう

【Ｎコード】

Ｎ８２０７Ｆ

【作者名】

やさいとぶどう

【あらすじ】

圧倒的なリアリティで贈るひきこもり譚！はたして作者はひきこもりなのか？！

『壱』（前書き）

はあ、またです。そうですひきこもりのお話です。
いや違いますよ、僕は別に普通に生活しています。
と言いたいところだけどやっぱり違うんだろなぁ。

『壱』

まわる闇と踊ろう

思い出すのも辛く、ひどく悲しい物語をここに書き残そうと思う。
きゃははと笑いながら、書こうと思う。

私は最後まで躍り狂っていられるだろうか。
流れ出る涙を枯らさずにいられるだろうか。

壱　　主人公、愚痴る。

たしか、ぼくのすぐ傍に闇があった。ぼくが世界のどこかで存在を始めたころも、朝に目覚めたときや、数十時間か生きてみて疲れたので眠ろうと布団の中に逃げ込んだときも、あった。なぜだか、いつでも暗闇のずっと奥のほうから僕をよぶ声が響いてくる。ちなみに、僕はちゃんと解っている。生命は黒を恐れ、死を畏怖する。人間が抱く死の幻視とは、暗黒だ。つまり闇を怖がるのは我々が生きるのを拒まぬよう造られた強制的な死の幻想である。これはもう、

間違いない。だからおそらく、僕がこの宇宙から存在を失くすときも、ある。

それなのに、僕は。

それなのに僕はなぜだかなぁ、その闇が、心地良い。

という訳で今日も僕はひきこもる。外の世界を無邪気に走り回る木枯らしに人々がふるえる、いつかの冬。このぼろアパート、日当たりが悪くて、昼間でも窓辺で影がお昼寝しているけれど、電気なんてつけるわけが無い。と言っても僕は別に、暗闇さんたちと仲がいいという事でもないのだが、彼らとはもう同居して長いし、互いに何も主張せず何を考えているのかもわからないのでどうでもいいや。というか、僕は元々誰かと仲良しこよしする能力が欠落している。他人や、大人にとってみれば、「元気な子かおとなしい子」かの差でしかないようだったけれど、そんなことはない。というかもう、呆れて笑うしかないんだけれど。奴らは、いったい何をとち狂ったことをほざいていやがるのだろう。その「か」ってところに想像を絶する痛みや苦しみが在るってことを、もう忘れちまったのか？僕はそれにずっと耐えてきた。ああ、そうか彼らは最初からそんなこと知りもしないのだ。そしておそらくこれからもそれを知ることはないだろう。なぜなら初めからその痛みの原子を持ち合わせていない上にそれを知ろうとする努力すら絶望し崩れ折れるほどに皆無なのだ。そう気づいた頃に、僕は教師や親を見限った。と心の中で言ってやってみても、教師どもは活発で元気でちょいと悪戯っぽい子がお気に入りだから、上手に挨拶できない僕みたいな子供のことなんぞはなから「平凡」な生徒として、教室の隅っこに煤けて埋もれていたはずだ。「せんせー」なんて言ってくれるのがいいんだろう？授業中に元気よく発言してくれるような奴がいいんだろう。世界の恐れや痛みをしらずに、積極的に行動できる生徒がいいんだろう。心臓が飛び跳ねてしまい、うまく意見を伝えられない子供は能力がないといって叱るのだろう？というか、おまえら大人はそう

いう子供たちに苛つきを感じているのだな。時には、ストレスのたまった教師が、僕を弱いものとして当り散らすんだ。
・・・今まで関わってきた教師はどれもそうだった。
僕はやつらを憎む。

このあと僕の回想は数時間続いた。ちなみに、「教師」という部分は「教室の生徒」「親」などという言葉と差し替えてもらってもかまわない。教師という単語を使用したほうがより的確に想像してもらえると思ったからという理由だけである。だからぼくにとってどれが一番嫌いとかいうのもない。どれも同じだけ嫌いである。まあつまり、こういった馬鹿な人間に、僕は十年以上傷つけられてきた。そして、死にたくないと必死で泣き叫ぶ僕のぴくぴくと痙攣した心を、やつらは思いきり踏み潰した。僕の全身にどろりとした真っ赤なものが飛び散る。
一人の少年は、こうして絶命した。彼らは僕のこれからの人生や、今まで必死に守り信じてきた僕の夢や才能を、握り締めた手からむしりとり、狂ったように笑いながら、思い切り投げ捨てた。残念なことに、僕は現在の世のクズとも言える人間たちによって、ひきこもりにされてしまった、ではなくそうすることを余儀なくされたのである。つまり、結果的にみれば僕がその道を選んだのだ。決して僕は自己を失ってなどいない。断じてあんな奴らのために・・・・・・。

現在、僕の心はずたぼろだ。数々のそれはもう凄まじい恐怖によって、僕はもう二度と人と関われない人間になってしまった。僕にはあんまり残っていなかった。あんまりだから僕にはもう何も残っていないわけではなかったのだ。たとえば、僕は声が出せるぞ。
「わあぁー」教師のことをおもいだして苛ついたので、絶叫してみる。
ほら、その声も聴こえる。声が響いてから、隣人に声が聞こえていないかとびくびくした。昼間なのに部屋にいるとばれてはいけな

いのだ。故に明かりもつけない。
匂いもわかる。
そういえば最近掃除をしていないからまずい、部屋全体が異臭を放ち始めているようだ。縮んだ胃袋では飽和してしまった食べかけの食料や太古の昔から洗われていないぐちゃぐちゃの衣服が小さな部屋にまんべんなく体積しているせいか。
それに目も見える。
一週間ぶりに鏡の前にたってみたら、更に酷いことになってたなあ、僕の顔。すごいなぁ、ゾンビだなぁ。ふふ・・・。些細なことに一喜一憂出来たのは、一体いつの頃のお話だったっけ？
僕は、物を掴める。
よし、それじゃあゲームでもしよう。僕はおもむろにそこら辺に転げていたコントローラーを拾い上げる。いやなことは全部忘れて、心を落ち着けよう・・・・・。
こいつ、早く気づくべきである。
お前がダメ人間なんだろ。

闇とは、妙に気があった。二度目になるが友人のご機嫌をとるための、
「おれたち、気が合うよな！」ではない。お互いに他者が嫌いなので無理に気を使わなくてもすむのだ。両者の心のバランスが崩れなければ、沈黙ほど心地がいいものはないだろうと思う。だから、ひきこもりだ。僕はひきこもり。学校や社会なんてところはもうあまりにもどうでもよい面倒な出来事が足の踏み場もないほどべったりと、地面に張り付きまくっている。時間の無駄が大量生産されている。なぜならば、人間がうじゃうじゃしているからだ。そのそれぞれが自分の事ばかり考え、しかも他人が自分をどう見てるかという事ばかりを気にし、挙句に手前のキャラ設定まで練り始める。いつかの日、ぼくが奴らの本性に気が付いたとき、正直吐き気がした。なんだ、こいつら。ぼくが今まで接してきた中で、一体どれほどの

言葉が本当だったと言うんだ？どれほどの人間が僕の内面をしっかりと見つめようとしてくれたのか？

　自分らしく生きれず押し固められた人生ならば、それは一体誰の人生だと言えるのだ。お前の物だと、声高らかに断言できるのか？否、絶対に無理だ。お前らなんかには微塵の可能性も残されてはいない。もう、一度でもやってしまったら取り返しがつかない。これから改めたとしても、絶対的に時すでに遅い。なぜならばもうあなたの生きた、生きる時間の一部は必要も無いほどに他の何かに浸食されている。他の何かとは、例えば他人であったり、あなたが猫かぶったもう一つの――――冷静になり、客観的にその姿を見つめてみれば「誰だこいつ」となる――――別人格だったりする。そんなもの自分じゃない。狂っている。もうどこがか自分のものでない以上、その一生を丸ごと抱きしめて持ち帰る権利は消滅してしまった。残念ながら、あなたがたの生きた証など、どこにも無い。

　だから僕は、自分の全て、命の価値、僅かでもその心に刻まれた誇り、それらを守るため自分の人生を奪われない前に、奴らの巣窟から走り去った。悪夢の輪廻転生の輪からＫｅｅｐ　ｏｕｔだ。この真実に明確に気づいた賢人は、ただひとり僕。残りの、あああまりにも悲しいじわりじわりと一分一秒ごとに自分の人生をがりりがりりと削りとられ自分以外の何かに搾取されているそしてそれに気づかずいや僅か表面だけでもその悪意を感じ取っていると言うのに恐怖にかまけて戦うことを怯えいつしか忘れる愚民どもは、まだあの異臭のするゴミ溜めの只中に・・・・・・。

　しかし僕はそんな人間たちにたいして「死ねばいい」なんて言う感情は持ち合わせる必要はない。周りの全てを消し去って自分独りになるなんてそれはあまりにも哀れで、矮小で惨めだと理解する。だから、世界の全てが嫌になったときこう叫べばいい。

さあ、一緒に・・・・・、

「死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にた

いい」

素晴らしき、これぞひきこもりによる悟りの境地である。

これは一見簡単なことのようであるが、皆がいつの間にか馬鹿にしてふらりと通りすぎてしまう。僕の周りには、誰一人として「死にたい」と言う感情、思考に真正面から向き合った勇者、というかごく普通の清純な人間は一人として存在しなかった。中学生、高校生の年頃には十の割合で皆がみんな「他人と同じ人生なんて嫌だ。自分だけ特別でありたい。普通なんてつまらないぜ。」と考える。わかったわかったもうそういうひらひらお飾りはいいから。うんざりだ。全員が「普通は嫌だ」と思考している時点であなたがた皆、そろってもれなく普通ですよ。

という蛇足話は横に追いやり、つまり、自分の存在を消すと言うことは同時に僕の周りの全ても姿を消すと言うことだ。確かに客観で考えれば世界はただ一つのゴミが居なくなるだけでいつもと何も変わることなく回り続ける。しかしそう考えるべきではない。それこそ人間の最も間抜けで馬鹿で浅はかな習性。

自分など、この世界に比べたらなんて小さな存在・・・。これが思考を操る故の僕らの弱点。

断じて、そうではない！

世界の全てはこの私が中心！と考える。思い込む。理解する。

僕がいるから、僕がこの無限宇宙に存在しているから、僕の目は世界を映し出すし世界もまたそこに存在して、することが出来ている。

つまり僕がこの宇宙の支配者、例え今はそうでないとしても僕は簡単にそうなることが出来る！

それはつまり・・・命を、絶つ事。これによって僕の主観的視点で存在していた馬鹿馬鹿しいほどただっぴろい世界は「うひゃああああ」と声をあげながらどっかにいってしまう。こうして、僕の手と手に握られたカッターナイフによって世界は滅却された。めでたし。しかし、悟りと言うものはつらつらと幾つかの文字や言葉を並べた

ところでその凄まじさを表現できるレベルのものではない。よって、先の文はこれっぽっちも宇宙の真理には近づけてはいないが、もしかしたらこれを読みじっくりと様々な考えを頭に巡らせている内に悟りの断片を感じとることが出来る人がいるかもしれない。もしあなたがそうでないとしたら、それはあなたが引きこもりでないからである。と断言したい。さあ、この混沌とした現代に悟りを開かんとするならば、今すぐｌｅｔ、ｓ引きこもり！引きこもるとは、すなわち内なる「己の心」に籠り三次元の空間全てから自分の考えを見つめそして見つめられ、その発狂するほどの圧迫や罪悪を感じながら幾年もそれに耐え続け、そしてさくりと突如心の壁が裂けだした時に流れ出す自分の生きるべき空間の空気の流れが膨大な感情や思念を含んだ肌にそっと柔らかく触れた時、その時！あなたは・・・大切な何かを感じえるだろう。という、そう言うことなのだ。

なぜかと言えばぼくはよく、人間として高い知能を内蔵した脳みそを与えられたのだしこれくらいのことは常に頭の辺りのほわっとした所に思い浮かべて置くべきではないだろうかと憤りを感じている。もちろん惰性に溺れるのもそいつの勝手だしそれで馬鹿な頭の悪いつまらない人間になったとしても普通に自業自得で僕には害も、もちろん利もない。（補足だけれど、僕は学校の勉強で教科書を睨みながらがり勉して成績良くなることは重要だと思っていないし、それが頭いいと言うことだとも思っていない。ただし、嫌々ではなくそれが自分の生きる意味だ、と強く感じるのならば、きっとやるべきだ）。するといつしかその頭上あたりのはわっとしたイメージが克明に繊細になっていき、いつでもはっきりとしたビジョンを作り出し眺めることが出来るようになる。これこそ、妄想。これぞ、妄想という。文字さえもかっちりとした形をもって見える。妄想、最高です。時に異世界の映像を創造し、時に苦しみを味わったことで見えてきた酷く大切そうな言葉を何行も連ねる。それらはどこかに物質的に記録して残したものではないけれど確かに僕の心に染み渡り、僕の大好きな自分を形成してゆく。わかったんだ。わかって欲

しい。それが、人間なんだってこと。ある夜、妄想世界で悟りのお告げを授けられた一人の少年。

・・・・・・くくく。おい、皮肉か？

やっぱり愚痴でした。

『壱』（後書き）

こんなのに完結があるのか？と自分でもおもってしまうほど適トーに書き綴っただけのお話です。
勢いで僕の他の小説も読んでみてくれまいか。

『弐』（前書き）

真実の話を致しますと、一話投下した時点ですでにこのお話は完結していました。
それを思い出したので、投稿します。
弐、参、終続けてご覧下さい、まるで猫のように温和な心をお持ちのあなた。

『弐』

弐　　いつかの日々

朝起きたら、十二時だった。今日は平日、当たり前のように学校へ行くべきでありそこで当たり前のように一日を過ごすべきなのだ。枕元には大分日の傾いた太陽の光が丁度良く降り注いでいる。

寝ぼけながら目を覚ますとき、霞んだ思考のなかで、なんとなくわかる。いつもより眠気が薄いから。

「・・・あぁやべぇ。もう遅刻だ。と言うか無断欠席？もう昼だろ、これ。さしずめ。昼だ。うん。だろ？」

いくばかの期待を込めて時計を見る。目が怯えている。正午。

「ううう・・・やっぱりかよ。あー・・・もう。」

厚ぼったい脱力感が苛付くほど全身にまとわる。もう嫌だと泣き言を何度も呟く。

理由は大体わかっていた。昨晩深夜まで小説を読んでいて、いつになってもページが終わる様子がなく、あまりに面白かったために僕の欲望も終わる気配を見せず、巨大な開放感を持って本を閉じたとき、気づけばもうすぐ夜明け。早朝の白んだ空にかすかに響く小鳥のさえずりや、暢気にお休み中のご家庭にせっせと朝刊を配る新聞配達バイクの走る音が聞こえてくる。冷たい空気が広がる部屋には、何の音もない。

あまりに寂しいよ。だから、ぼくは眠ることにした。ベットの上に散乱した漫画や小説に埋もれながら丸くなった。自分は上手に眠りにつくことが苦手だった。だからいつも寝る前に何か考えるようにしている。というか考えてしまうのだろうか。さっき読んだ小説は何人も人が死んで、誰や彼の生きる意味とか死ぬ理由とかそういうことを皆が必死に考えていた。その絶望や葛藤のなかで戦ってい

た。こんな僕らの生活がどうしようもなくちゃっちく見えてしまう。そんな物語だった。つまらない日本中どこにでもある悩みに苦しむ僕が、わざとらしく見え、あまりに滑稽に感じた。僕はどうするべきなんだろう。この世界でどう生きればいい？こんな事を癖のように毎日頭の中で繰り返す。意味の無い自問自答。そんなことは解っていた。いや本当は、解るべきではないのかも知れない。だけど僕は辛さや苦しみに直面すると漠然と自分に問いかけ、悩み考えるふりをし、結局無意識に逃避しているだけなんだろう。僕の周りの世界は、自体が好転しているのか後退しているのか僕は動いているのか立ち止まって何かを眺めているのかどうなのか一つとしてさっぱりわからない。事実僕の生きる運命とはあまりにも普通だ。それは普遍的というわけではないけれど、僕自身が、きっとすでに粘土を練って焼き上げられてしまった人形なんだ。決していいわけでもない。悪いわけでもない。時には心が激しい退屈を訴え悪いほうにさえすがりつきたくなる。最近、本当に悲しくなって涙を流しそうになるときがよくある。だって僕の周りには数えてみると結構な悲しみや苦しみがあって、きっと今の感情もそうなんだろうけど、それを震える両手で掻き集めてみれば僕の眼前は巨大な不幸の山が出来ている。「不幸」の定義は良くわからないけれど、その人が「ああこれは不幸だな」とそう思えば不幸なんではないだろうか。なんでもない日常をふりかけるだけならば、神様せめて僕の貧弱な体躯にふりかかるのはささやかな幸福にしてください。それが傲慢だと叱るつもりならば、その苦しみの渦巻く不幸を一度に僕にかぶせて下さい。それで平凡でなくなるのなら僕の心はそれを甘んじて受け入れる心積もりだろうから。・・・こんなこと、あまりにも哀れすぎる。自分が嫌になる。ああほんと駄目だなあ自分。誰か、誰でもいいので今すぐ走ってやってきて、夜明けに苦しむ独りぼっちの少年を助けてやって下さい。抱きしめてください。誰か・・・・・・。

　その小さな想いは永遠に誰にも届くことはない。形や物質性の無いものは他生物の手に渡ることはないから。なのにどうして、僕は

考えるんだ。膨大な思念を生み出したとして、それらの存在した時間はこの世界にあった事になるのか。何にも、僕の脳からさえも、いつしか無に帰していってしまうそれらを生み出した意味とは何なんだろう。いや、全ての出来事に意味や見返りを求めるなんて無駄な事だとは知っている。僕のために生み出され起きた出来事なんて、笑っちゃうぐらい一つも無い。そりゃ、僕と同じような６０億の人間＋複雑な生態系図を抱える自然生物＋世界の大地を支える植物、大いなる木々・大樹＋あとは現世界の空間を創りあげている、しかし人間たちは自分たちが地球を繁栄させてきたと心のどっかで勘違いしているようでむしろあなた方は一介の地球生物に過ぎないしなぜ我々の星地球を守ろうとか発展させようとかいうニュアンスになってくるのかが理解できない上にたのむから一つもプラスになることをやっていないってのを解ってほしいあなた達は自分の為にしかならないことでやがて星を滅ぼそうとしている小さいつまらないうんざりするゴミめそんな人間たちが存在し、自在に動ける空と大地を造った知られざる無数の無機物ら。世界は蠢いている。それすら果てなく広がる宇宙世界に比べれば、いや地球（もう一度言っておくが断じて「我々の」星ではない）の所属する大宇宙の一部分である銀河団にとってすら余りに小さい。いや、小さくも無い。視認すら出来ない極小の神秘。誰にも気付かれずに煌きながら世界の全てに含まれ世界の一つのこらずを含んでいる小さな小さなそれら、それすらとも交わらない。と言うよりも向こうはこちらには無関心。愛情の反対側とは無関心だ。僕らはあまりに曖昧。ダサい。

　そんな中で、きっとあるはずなんだ。僕が苦しみながらも全力で生きるだろう一生の中で、まるで奇跡みたいな確率で僕にも、やってくるはずだから。僕のために生き物が、空が、大地が、この星が、僕の為に作られた出来事を贈る。その時、僕はあがいてやろうと思う。それがそんなにカッコいい事じゃなくても、平凡で丸っこくても。この僕のままの大きさで何よりも自然に、自分らしく、生命としての時を刻もう。そうすればきっと。それこそが、僕。何よりも

まっすぐ、自己を証明してくれる。僕の生きた証、意味。だから大丈夫、生きてればなんとかなる。生きていれば。今はどんなに無様で間違いだらけで、誰からも蔑まれ自分すら自分を好きになれなくても、生きる意味なんてこれっぽちも見つけられなくても、大丈夫。なんとかなるから。だからそういう風にこれから僕は生きようと思った。一瞬を信じ祈りながら・・・・・・。

やがて意識が灰色のグラデーションを描いて遠のき、人生初の今日という日は人間が決めた区切りによって終わりを迎えたことになる。さよなら僕。そう出来たならどんなにいいかなあ。

不幸や幸福。それらの定義は溶け出した水彩の青のように曖昧だ。だからこそそれらを並べて見てると面白いのかもしれないけれど、それにしても気持ち悪い。ここで例え話。僕にはどうしても理解できないと言うか、見てて「こいつ糞だな」とか思ってしまうんだけど、学校にはイジられて喜ぶ奴がいる。あれが嫌いだ。やつらはすぐに見分けがつく。意味無く笑うんだ。例えば、なにか嫌なことがあったとする。苛められたとかで物を隠された。と思ったらゴミ箱や外にブチまかれていた。不意打ちでつばを吐かれた。叩かれた。ウイルスだと言われ無視された。こんなような事態が起こった時、笑う奴がいる。まるでそういうどうしようもない位人を傷つける行動をしてる人間に媚びるように、肯定するように口の端をゆがませて笑いやがる。

なぜ笑う。違うだろう。

いじられる事で周りが盛り上がると、喜んでいる。自分は？あなたの心は何とも言っていないのですね？

つまり、こんなような人間とは僕の幸福や不幸の定義は余りにも異なる。笑うってことの意味もまったく違うんだろう。また、このパターンの中でも二つの人間に分かれる。いじられることで皆に好かれているんだなと思う人間と、悔しがっている人間。これらの見分けもすぐにつく。笑うと言う行為は誤魔化しや自分を守るための

行動でもある。戦う意思が僅かでも心底に沈殿している人間は楽しそうに笑っていない。
もう一つは単純に勘違いしている。だから楽しそうだ。僕は、これが解らない。
そして、この「勘違いしている。理解できない。」こそが、価値観の違いという。「勘違い」なんて、本人にしてみれば正しいしむしろ当たり前の事柄として受け止めているんだろう。それを「解らない」と言っている僕なんかは、その人にしてみればまるっきりわけ「解らない」んだろうと。
人と人なんてその堂々巡りなんだ。お互いの心に強くもっている譲れない柱のおかげで仲良くなったり傷つけあったりする。引き返せない意地でもってずっと支える柱のせいで幸せを感じたり不幸を味わったりする。そして「譲れない」「引き返せない」の意味の強さすら異なる。
それが人だ。それを醜いと吐き捨てる誰かもいるだろう。そいつですら人間なんだ。
水彩はきちっとした「何色」って表現が出来なくて、無限に溶け合い混ざり流れ連なっていく。文字という存在によってばらされたそれらに水をたらしてみると、今度は色の名称なんていうものはほつれて無くなり、それすらも合わさって色を作る。綺麗な様子だ。別の存在である色々が一緒になってゆくさまがいい。だって僕らはそのために居るんだろう？君と僕。あなたと私。自分と、他の誰かが一つの場所に居る意味。言葉や、思いを隠しあったり見せ合ったりする理由。
だから僕は水彩が好きだ。どんなに辛くたって、それらが僕らを強くしてくれるのを知っているから。どんなに逃げ出したくなっても、人と関わるのを捨てちゃいけない。ぽいっと投げて「こんなもんいらねーや！」と叫んではいけない。そうすると僕はそれに嫌われて、ずっと一人になってしまう。だから僕は筆を振るいつづける。人は描き続ける。

この頃はまだ、自分が油絵の具になるだろうなんてことは考えてもいなかった。僕はまだ大好きな水彩画を描いていられた。人として、生きていた。あのころの毎日。

起きて時計をみたら十二時だ。昼じゃなくて、夜の。もう真っ暗だ。その悲しみを満遍なく含んだ暗さは意図して僕のために作られたんだろうなと思った。こんな惨めでどうしようもない臆病者に、あまりにお似合いだろう？

さっき昼に起き出して、自分が物凄く具合悪いことに気が付いたので、また眠った。もう、学校どころじゃない。死んでしまう勢いだった。体ではなくて、心の具合が。自殺しなくてよかった。ぐだぐだ迷わずさっさと寝たそこの判断は良かったよなぁと回想する。するとどうしたことだ、朝から夜の人生をすっとばして夜中になっているではないか！目を閉じて、開けた瞬間に夜である。そうか、これは宇宙人による人間タイムワープさせちゃうぞビックリイタズラ大作戦なのか。しかし本能的な部分が働き始めると人間って物を考えるどころじゃないんだなぁ、さっきからお腹が胃袋の辺りから悪魔の様な痛みを発し続けるのに加えて気持ちが悪く、枕元で胃液を何度も吐いた。うーん、体を一切動かしていない上に丸一日何も食べていないせいで身体の自律神経はシッチャカメッチャカになってしまったらしい。これを元に復元するのは相当難儀なこっちゃだぞ。顔を思いきり歪ませながら布団から這い出し、急いで冷蔵庫を目指す。苛つきに任せて勢いよく冷蔵庫の扉を開けたつもりだったが、のんびりとゆるい曲線を描きながら扉が開き、冷気が流れて出てくる。それにすら苛付く。じわりと染み込んでくる冷たさを「気持ち悪りぃんだよお」と罵倒した。ああくるっしい。余裕のない頭で食べられそうなものを選別し片っ端から腹に収める。台所からは「うぅう。ぅうううう。」という低い呻き声が数分間垂れ流れ続けていた。その後姿は他人から見れば迷い無く下卑するべき対象とな

るものだろう。人間はある因果の下に運命を背負い歩いている。それは弱者と強者、強い人と弱い人という概念。

よく才能や能力のない人間は必要ではないという言葉を耳にするが、そんなことはない。奴らにもきちんと存在する意味を持っている。何故ならば、そういう雑魚的な他の何かを見下すことによってそれ以外の人間たちは安心感を得、自分の存在意義を確かめることが出来るからだ。だがしかし、稀にそういう雑魚どもをほっておけないおせっかいな人間がいたりする。そういうのが、本当に上の人間だと思うんだけどなぁ。まあ、上の人間と言ってもつまり、僕が一番気に食わない連中だったりするけれど。とりあえず、僕はその雑魚キャラの方で間違いない。

・・・あぁぁ、無様だなあ。世界って何なんだと思う。こんなにたくさん辛いことを作って一体全体何をどうしたいのだと憤りたい。

僕らに

生を強いるのならばもっと世界は楽しいことで満ち溢れていてもいいはずなのに。それなのになんなんだよ、周りの何もかも。それに僕も。どうしてこんなにも、僕らは脆い。そのせいで生きている僕らと、生きるための僕らは余りに相性が悪いんだと思う。しかも一方的に生きている脆く弱い僕らの魂が、生きるための肉体やそれと一瞬の微塵の断絶すらもなく密接している世界に攻められ続ける。また、そのどちらも永遠に、離れることはない。僕らはその苦しみを享受し、歯向かうことをあきらめながらも、それでもなお、そしてこそ生きなければならない。なぜなら生きることも、いやただ生き抜くことすらもとてつもなく困難だが、死ぬこともまた難しい。なぜならば自ら死ぬ出来事の難易度と、それを選択し実行することの勇気は現代人間的感覚をもってすれば完璧に別物だからだ。だらだらとなんでもないどうでもいい生き方を続ける方がよっぽど楽チンなんだ。いや、今の世の中は、そして人の心はそれすらも許しはしない。当人の心さえも。

ああ、死ねば離れるか。

貴重な食料を食い漁っていたそれが突然トイレに飛び込むと、しばらくして晴れやかな表情を浮かべた無意味に愉快そうな男が出てきた。

ああ、人生って素晴らしい。健全な体でいることがこんなにも素敵な気持ちになれることだったなんて。今まで多くの人間たちを突き刺してぼこぼこと変形した針がずっと遠くの向こうまで無限に突き出し立ち並んだ道を歩いてきた僕は、たまにただの平らな地面を踏締めただけで平和を感じそれを幸福だと錯覚してしまう。そうだ、これは思い違い、恐るべき世界の罠。小さな「幸せ」とやらを僕らの眼前にちらつかせることで僕らをあっさりと騙す。僕はそれに気付いている。だからこれは世界を騙すための芝居だ。騙されたふりをし、騙し返す。恐るべき極楽浄土から囚われの君らを救うために戦う。そうやって英雄ぶって戦ってきたつもりだったんだ。けれど歪んだ作り笑いが少しずつ心を穿って無くしていった。それを見て見ぬようにしながらも尚僕は続ける。やっぱり駄目だったのか。そうわかっているのに。結局抜け出してはいなかった。僕という存在は大きな何かの掌で舞い踊る踊る埃だったか。自分だけはそうではないと、確信したように、そうであってくれともはや祈るように思っていたのに。そうだったはずなのに。はずだったっけ？いやいやいや全て、狂言だった。それはそう思うまでは違ったのに、僕の心が僅かばかりでもお前の全ての言葉偽りだったと囁いた。僕には、どうあがいてもそれを「違う！だって僕は今もここに生きているだろう？」と叫ぶことはならなかった。どうしてそれを否定することが出来るだろうか？そうできるほどの能力が、自分にあるとそう言うのか？だから僕はその通りなんだろう。ここにいつの間にか手や足の先には雁字搦めになった鎖が重い。その鎖はだらっとした生がすぐ横で縞模様に流れているのを見過ごしてきた代償だろうか。多くの人間や物や自分の意思他人の意思などが僕の中に蓄積され僕のギアを重くし動きをこれでもかと鈍らせる。そして僕はそんな自分の姿を見て絶望の涙を流しながらそれでもなお自分の価値を、押し

つぶされ圧縮され噴出し仕切りのない上空の方へ気化したそれら、自分の目を疑うほどに目を凝らしても見えにくいほどに薄っぺらくなってしまった「自分」を飛ばされないように、無関心という害意に彼方へと引きちぎられ吹き飛ばされないように、抱いて僕は歩いた。それは長い永い戦いだった。いやそう感じただけだったのか果たしてその行動それのみだったのかも知ることが出来なかったけれど、だって僕はもう・・・・・・。振り返って、いつ頃か、僕という人間が生きた道をみた。僕は思い切り笑ったよ。声がトップスピードで喉から滑り出し荒野の瘴気を割った。僕は一歩として動いちゃいない。もうどうしようもない。取り返しのつかない。だけど、僕にはそれがなんなんだなんなんだなんなんだかなんなのか最期まで、僕の終わりまで解らなかった。いや、きっと終わってみても解らない。当たり前の人間が当たり前のように知ることの出来るそれを僕は知らない。もしそれが生まれたときから決まっていたことなんだとしてみたら、ああほら僕って、秒針が回り始めた瞬間から愛情も憎悪も受けることなく、それを真似た良く似た空っぽのどうでもいいばかりが僕の体をすかすかと通り過ぎていったことにも気が付かなくて、世界で一番悲しくて、辛くて、でも醜すぎて誰もそれに涙を流すことのない、それが僕。そう思ってしまったら、もうその通り。神様の無関心というイレギュラーが人々の目を逸らさせた。故に誰も僕の悲しみを知らない。知れない。誰かに知って欲しくて憎しみをぶつけるのにも疲れた。

僕って、要らなかった。

「ははあ

・・・・・・僕は、もう駄目だ。だれか僕の代わりに戦って欲しい。僕が今まで戦ってきた　僕と。僕に代わって、そして僕と戦っ

て――――・・・。
　ぶつりと音を立てて世界と僕を繋ぐ何かかが裂け落ちた。僕の立つべき舞台はもうここではない。戦うリングが変わったんだね。
あっははっはっははははははははははははははは」
　それじゃ、皆さんばいばい。死んでください。

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

のを感じズた。

■　■　■

ズ　ズ　ズ　ズ　ズ　ズ　ズ　ズ　ズ　ズ　ズ

闇が体をズズズ包む

『弐』（後書き）

ぬぐったら、また黒くなりました。そういう悲しい想いをしてる心がそこらじゅうにある。

『参』（前書き）

まわる闇と踊った少年の言葉の群れは、ついに終着点へとたどり着きます。それではどうぞ・・・。

『参』

参　この世はフィクション！

これもいつかのお話。
僕の世界は変わった。けれどもし僕が自分のことを斜め上後方から眺めることが出来たなら、そこから眺める僕はいつもの僕だった。椅子に座って小さく背中の丸まった男の子がいた。彼はその目に何を写しているのだろうか。

空間のどこかに灰色の動物が一匹いた。それは酷く解りづらいけれど確かに生きていた。こんなんでいいのか良くわからないけど、僕は生きてる。誰かに存在を示すことをあきらめたその心臓の鼓動は、だけど一つしかない場所にどうしようもなく、仕方なく、鳴っていた。君はこう言っていたのか？誰かに思いを伝える為の言葉を思いを隠すための言葉を内に篭らせたまま響かせる。自分だけに聞かせるように放つ。彼は自分を苛め抜く。
毎朝決まった時間に無理やり起きること、冷気に身を震わせながら息を上げて通学路を走ること、心からどうでもいいと思っている勉強によって一日の大半を潰し、休み時間には心底つまらなくやはりどうでもいい話題を喋って、そして一日が過ぎていくこと。そんなのはもう嫌だ。あまりにも、縛られすぎた日常だった。明日もあさってもその時間に僕がどこで何をしているのかはっきりとわかってしまう。そんなことはもううんざりだった。疲れてしまった。だって僕が心を許せる人間はもう世界のどこを探したっていないんだ。そういう気がしてならなかった。
これほどまでに雁字搦めに無茶苦茶に絡まりながら「わからなく」なったことは初めてだ。もう何も考えることが出来ない。答えが、

ほんのちょびっとのしるしも見当たらず、これは完全な暗闇。五感の全てが断たれて、残るは心のみ。何の外壁も武器も持たない今、心を強く保たないと折れる。もうわけがわからない。思考が停止状態。どうすれば？どうすればいい。じわっとした焦りを遠くで感じる。その大事な感覚すらも薄れゆく。なくなっていくことにも何も感じない。誰の言葉も僕に触れることすら出来ない。例えば好きだったミュージシャンとか小説家とか漫画家とかそういう人間たちがまあいろいろとのたまっているわけです。ああどいつもこいつも好き勝手いってやがるなあと、きっと彼らだって僕とそう変わりはしない、人間の行動は全て自己満足のためにあるのだからとそう吐き捨てる。疲れているのだろうか。

学校の教室で自分の席に座ったまま俯いていると入り組んだ広大な迷路が僕を取り囲んでいるような気持ちになる。僕が心休まる場所はどこにもない。どうしてだろうか。己の非力さを悔いては、なぜか周りを呪う。自分は、もしかしたらとんでもない馬鹿なのかもしれない。今まで、自分は馬鹿じゃないとそう思っていた。だからこそ、もしかしたらこんなに永い間その事実に気付けずにいた僕は世界規模の馬鹿なのやもしれぬ。

優しい、ということは悲しい。どうしようもないくらいに悲しくて、だからこそ優しい。悲しくて痛くて辛いからもう二度と出遭いたくなくてそれで人は優しくなってしまうんだ。そういう優しさしか、僕は知らない。そういう優しさでしか僕を知れない自分が嫌になって、ああそうだ、僕はいつものようにこう呟く。

「死にたいよ。」

ぶたれる痛さとか、辛く当られた人間の絶望とか、何か靄がかるような不安が自分の周囲をとりまいた時の理不尽な悲しみや怒りとか、笑ってない人が感じている心の泣き叫びとか、笑っている顔が砕けたときの圧迫とか、ただ僕らの心を傷つけるだけの本当は一つだって知り得なくてよかったそれらを、僕は鮮血とともに心の蔵に刻みつけられた。もうどうしようもなく怖かったそれだけだった。

負の感情に慣れるなんてことはいつになってみても有り得ることは無くただそれに耐えること、弱さの部分が零れ落ちそうになるのを必死に耐えることだけが使い古され「うん、いつも通りだな。」と言うかのように慣れていった。悲しい。悲しい。（ぽたり）悲しい。悲しい。（ぽたり）悲しい悲しい（だから）・・・優しくならなくちゃ。

うふふ・・・。だから？

だから。

だから。

だから。

僕は馬鹿なんだなぁ。

知ってるかい？名前も知らない誰か。僕とおんなじこの世界に存在するその人。閉じた世界に内在されている余りにも同じ苦しみや降伏に良く似た幸福を縛りつけられいつの間にか一人分空間を失くして生れ落ちたあなた、人間よ。

僕らは何か縋るものが無いと生きて行けないんだよ。進めない。ずり落とされる。僕が特に何の事も知る必要のないあなたは、知っているかな、その感情を。何かに引きずられて、否きっと自分さ、それに引きずられて知らないところへ落とされてゆくときの、嗚呼、僕らはいつだってつき落とされそれでも目を見張って未知なる次の舞台へと向かってきたはずなのに、そうですよねぇ？違うんですよ、そうじゃなくて、ねえ、僕が死んで欲しいとたまに願ってしまった君、そのときの、「僕ら」のその感情を。

知ってる無いはずのそれを。

知っているかい？一人の誰かが今「さらば」とそう言おうとしている。あるべきに貰い受けるべきだった未来やら何やらをついに全力で投げ捨て千切れた腕で、世界の全てとを断ち切ったあのときの黒を見つめながら、僕はやっとたどり着くよ。未来で刻まれてゆくだろうはずだった僕の歩く道は世界の運命から外れ姿を消し、それでもこれだけはあったはずの過去の足跡さえまで木っ端微塵に吹き

飛ばして、それは、おそらく誰でもなく僕だから、やれること。なんだ、こんなところにあったじゃないか・・・・・・僕の存在意義。別にここで大笑いしてもいいのかもしれない。こうやって。あの、でも僕は知っているんです、そんなちっぽけな存在価値なんて、やっとこさ自分で捻り出しただけのモンだって。それが真実として大正解なものなのかどうか、僕は疑問することすら疲れてしまったよ。だから、こそなんだろうな。

僕が愛したかった、心から愛することを願った君らへ。

僕の世界のほうで小さな静寂があった。

しかしもうそろそろ僕のとってその言葉の意味は融解し消滅を始めていた。

もし僕が自分のことを斜め上後方から眺めることが出来たなら、小さく背中の丸まった男の子がいただろう。彼はその目に何を写しているのだろうか。もうすぐここは見れなくなる。わずかばかりの優しい感情の漂いも感じることは無くなる。いや、いいんだ。僕が向かう場所でどんなにがんばってみても自分を好きになれずに泣いたとしたら、孤独に耐え切れず叫んだとしたら、思い出すことにしよう。暗い暗い自分そっくりの重圧の中でもし息をすることを躊躇ってしまうことになったらこう思い出そう。だって、僕は捨ててなんかいないのだから。

「僕は生きて」その言葉を感じて空気が揺れ踊ってくれることはなかった。もう、声さえも。「いるから・・・。」

心残りはあるはずがなかった。あっていいわけがない。ここは僕の居るべき、僕の生きることの出来る世界じゃない。様々な特異環境が僕を破壊に追いやることをやめないのだから。

たくさんの物体が飛び交っていた僕の世界が放すことをやめ静かになる。

何かが決裂し決定したように整列した。

ああ、でも最期にこういっておくよ。僕は追いやられたわけではない。

僕がどうすればいいのかではない。僕がどうしたいか。

僕の、心だ。

「いざ、さらば。」

いとしい。僕の――――・・・・

■■■たしか、ぼくのすぐ傍に闇があった。ぼくが世界のどこかで存在を始めたころも、朝に目覚めたときや、数十時間か生きてみて疲れたので眠ろうと布団の中に逃げ込んだときも、あった。なぜ

だか、いつでも暗闇のずっと奥のほうから僕をよぶ声が響いてくる。ちなみに、僕はちゃんと解っている。生命は黒を恐れ、死を畏怖する。人間が抱く死の幻視とは、暗黒だ。つまり闇を怖がるのは我々が生きるのを拒まぬよう造られた強制的な死の幻想である。これはもう、間違いない。だからおそらく、僕がこの宇宙から存在を失くすときも、ある。

それなのに、僕は。

それなのに僕はなぜだかなぁ、その闇が、心地良い。■■■

そして、僕はひきこもりになった。ぼろアパートの錆びついた階段を危険を知らせる線路の遮断機のような音を鳴らしながら踏締め、薄い扉を軋ませてその向こう側を見たなら、僕の生きる殆どがざらつきながらそこいらに落ち込んでいるしかく■い空間が見えるはずである。

そこで影が言った。

■■■ひきこもりになった僕が部屋に入ると、おまえがいた。今まで気が付かなかった理由はなんとなく解ったのでさほど驚きや衝撃といった類の心地いい感覚は生まれなかった。あの日から、僕らの同居生活が始まった。■■■

僕が言う。

なあ、おまえにさあ、今更だけんど言っておきたいことがあるんよ。

影が応えた。

■■■なんだい？相棒、いや同類さん。僕らは似てるってか？そりゃ今更だな。■■■

影が笑う。

ああ、そうだな。じゃなくてさあ――・・・

人間が敗れて破れて幾つにもなり、今時間軸は現在に戻ってきた。
綺麗な色をした幾つもの言葉を、一度に混ぜ合わせてみたら真っ黒になって固まったよ。
今まで長らく語らってきた僕の役目ももうすぐ終わる。
どちらがどちらかとか誰が誰でなんてことはもうどうでもいい。だって僕らは同じ。どっちがっどちでもあるし、誰が誰でもあるんだ、きっと。そういうどうでもいいお話。そんなのどうでもいいぜっていう御伽。僕らはそんな世界の主役。だって僕らは・・・
ひきこもりだから。

暗いダンスホールはいつまで経っても静寂のロックが劈く勢いが全力で響いて、壁を突き刺し貫き、ひび割れ尖ったたくさんの言葉が舞って、飲み込まれてゆく。

・・・――――お前がダメ人間なんだろ。
■■■うん、そうな。■■■
踊り狂う影たちが笑った。

終　つれづれなるままに・・・

大丈夫。僕らは生きていればなんとかなります。世界がどんなに醜く見えたって自分が本当にダメに思えても、生きてればなんとかなる。

あまりに辛すぎたら逃げてしまえばいい。社会の渦から逃げ出したって生きていれば。

死ななければ。なんとかなるから。だから、大丈夫。これできっといい方向にころがっていくよ。

そう思っていれば大丈夫です。

長い人生。あなたも道中、お気をつけて。

それではこれにて御免。

『参』（後書き）

救いようがない。漫画でも小説でもお話はハッピーエンドが基本の
僕にしてみれば随分、自分としてもなんとなく後味が悪い。
だから、こそなんだろうな。
この小説の生きる意味。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8207f/

まわる闇と踊ろう

2010年11月2日14時41分発行